

受け継ぎ、
伝えるものとは、
何か？

教育の価値を破壊する ジェンダーフリー

帰国子女が四十年たつて
きづいたこと
それは、伝統と歴史の中から、
日本人であることを学ぶことが
教育の基本であるという真実だ

城内実

前衆議院議員

ジェンダーフリーは時代遅れ

最近、いわゆる「ジェンダーフリー」教育の弊害が言われるようになってきました。人間の基本的な役割の一つである、男と女の性差を極端に無視する傾向があり、それがまた、過激な性教育を生んでいると言われています。幸い私の子供はまだ小学校

三年なので、学校でそのような弊害はないようです。しかし、多くの方が指摘するように、「性教育」の名の下に、低年齢から性行為そのものを教えるようなことが平然と行われるようになりました。

その結果、子供たちは自然に身につける羞恥心、異性への恥じらい、憧れという素朴な人間的感情を失い、

即物的で肉体的な性行為に触れようとしてます。そのようなことになると、人間が長い歴史をかけて培ってきた知恵を自ら放棄することになるのではないのでしょうか？

そもそも性教育というのは、積極的に教えるべきではないと私は考えています。個人個人、それぞれに受け止め方があって、自然と「性」に気

がつけばいいのであって、私自身は、ことさら「性教育」を教える気はありません。発達段階が違う子供たちはどうやって教えるかというのは難しい問題です。

それこそ、一部の強権的なジェンダー・フリー的な思考をする人でなければ教えられないと思います。そもそもジェンダー・フリーという概念は根底にかなりおかしいものがあります。性差というものが生物学的にあるわけですから、男と女、どちらが偉いかとか、どちらが優れているということではありません。

私たちは、男女の「差」があるという前提は、まず認めるべきなのではないでしょうか？ 自然の恵みとか、人間の本来持っている生命とか、そういうことを考えれば、性差が顕著であればある程、人間らしい、自然界の摂理に適っていると考えることができると思います。そういう自然

界の姿や環境問題に相反するような考え方が、ジェンダー・フリーの本質なのではないかと思えます。

ところが、一部の活動家の人たちは何か勘違いしています。確かに、世界各国にはジェンダー・フリーに關して過激なことを言う人たちがいますが、そういう主張が各国で受け入れられているかと言えばそうではなく、極端なことを言っている人たちが一部にいるということなのです。

わが国の場合、面白いと思うのは、一昔前に欧米で流行っていた思想や時代の潮流が、五年か十年後にポツと出てくることです。しかし、日本でファッションとなり、新しい考え方や持て囃されるときに、「元の国では、そんな思想家が昔いたなあ、というようなことになっているのです。アメリカのウーマンリブ、フェミニズムもそうですし、郵政民営化問題も含めた、市場原理主義もそうです。

規制緩和をして市場原理主義へ、という考えはもうアメリカでは軌道修正してしまいました。アメリカにおいては、極端に行き過ぎたものは軌道修正を余儀なくされるのに、日本では軌道修正が行われないという滑稽なことがあります。

知識より、知性、そして靈性を

教育一般で言えば、小学生の教科書を見て気づいたことがあります。非常に教科書の中身が薄っぺらいのです。日本人による日本人のための教科書ではなく、個人による個人のための教科書というか、どの教科書を取っても、日本人である意味や日本人である誇り、それと同時に国際社会の中の日本人としての役割を全く教えていないのです。

無国籍教科書であるにもかかわらず、エスペラント語で書かれてい

はまだ分かるのですが、日本語で書いてある。それが滑稽です。なぜなら、私は小学校四年生までドイツの小学校で教育を受けてきたので、ドイツでは郷土の誇り、ヨーロッパ人としての誇りをしっかり教えていることを知っているからです。ドイツ人としてのナチスの反省もあります。が、と同時にドイツの歴史、ドイツの文化をきちんと教えています。

日本の教科書でアジア人の誇りが必要かどうかは別として、日本人としての誇りすら何一つも教えないで、非常に無味乾燥な、単なる知識の詰め込みになっていると思います。

私が考えるあるべき教育とは、単に知識だけでなく、知識よりも知性を重要視するものです。何かを知っているかよりも、知識の背景にある歴史や文化、それらを含めた知性を身に身につけることが大事であって、知識よりも知性、さらに知性よりも

感性、感性と同時に霊性と言える霊的なものに思いをめぐらすことができる教育です。

今まがい物のスピリチュアルブームがありますが、そういうものではありません。本来の日本人のその霊性とは、小林一茶の「古池や 蛙とびこむ 水の音」という、この五・七・五だけで、その情景が浮かんでくると同時に、それを言葉として捉えるような、感性、霊性で、本来日本人が持っているはずのもので、英語やドイツ語という言語と比べて、日本語の持つ霊的なものは大きな特色です。そういう背景を含めて日本の国語をきちんと教育しているかが問題なのです。

帰国子女が発見した日本

私は小学校一年から四年までドイツにいたので、日本とドイツを比較

いうことまで学べるわけです。

日本が世界に発信できる

田植えは重要です。協力しながら稲を植え刈る時も協力して行う。これが太古以来の、日本の豊葦原瑞穂国です。その収穫の喜び、青々とした稲穂の風景、蜻蛉が飛んでいます。これが日本の原点かという感じを、そういう体験を小学生の頃からさせる。太陽の恵み、食の有難さ、そういうことを体で教えることです。狩猟民族と違うのは、弱肉強食型でなく、みんなで協力し、分け前を一人占めしないところにあります。日本の心、日本の国柄を体験させること、武道や華道、茶道などの伝統文化も必修にするべきです。

そういうことに、やっと帰国子女の私が四十年経って気づきました。日本の場合、特に戦後の教育の場合

しやすいのです。日本の教育で変えなければいけないところは、前述した「ジェンダー・フリー」もそうですが、過度に欧米的な個人主義を基にした自己決定権を必要以上に重視することです。例えばフリーセックスに見られるように、自分たちが決定して何が悪いのかという意識が、小学生的墮胎の増加という事態を生み、性の低年齢化を促しています。また、それが極端に言えば、それこそ自殺しようが、人を殺そうが勝手という話になります。行き過ぎた自己決定権が問題なのです。

これは、日本が欧米と文化的な背景が違うにもかかわらず、敗戦後の占領下以降に誤った個人主義が氾濫したことと無関係ではありません。欧米では、権力からの抑圧に革命があり、そこから生まれた極端な資本主義、帝国主義の下で、極権から解放するという意味での個人主義、自

は、教育基本法が基本になりましたが、これはアメリカの占領政策の下で、アメリカの主流派ではない一部が実験的に日本に行った施策だったわけです。アメリカの良識ある人たちでなく、異端な人たちが日本で実験的なことをしたのが不幸の始まりでした。

日本の伝統文化や歴史を誇りをもって語れないような国民は、国際人として尊敬されるわけがありません。日本は悪いことをしたと平気で外国人に言う知識人が馬鹿にされている現状があります。歴史教科書を変え、することも大切ですが、副読本をどんどん作って日本の歴史をきちんと教えることが重要になるわけです。

そういう日本が、二十一世紀の今、アメリカや中国のような拝金主義の物質文明だけの国と異なった情報を世界に発信し、環境問題などでも世界に貢献していけるのです。

己決定権というものがありません。しかし、日本は、国柄が全く違います。農耕民族であることから、暗黙の信頼関係、和の精神、或いは地縁血縁、そういうものの中で、日本独自の共同体という概念が生まれ、その中で日本人は生きてきました。

教育も同じように、本来なら、日本の民族性、国柄にあった教育が必要で、それは、共存共栄、和の精神を重んじることです。私が提言するとしたら、国語教育をしっかりと学ぶ。その場合もやはり単なる記号として、言語としての日本語ではなくて、言葉も含めた、音の持つ微妙な美しい俳句や短歌を学ぶ日本語教育です。そういう意味で、教育勅語など、読めば読むほど日本語としての言葉として響いてくるものがあり、万葉集の歌も、古事記も、日本語としてだけでなくその場の空気を綺麗にする音や、響きを持っている、と